

中学校・高等学校保健体育「体育理論」領域の  
オリンピック教材作成の試み  
—オリンピック競技大会及びオリンピック・ムーブメント  
の学習内容とその系統性—

Teaching material on the content of the Olympic Games and the Olympic Movement for lessons in physical education theory based on the course of study for junior high schools and high schools in Japan

田端真弓\*

榊原浩晃\*\*

Mayumi TABATA\*

Hiroaki SAKAKIBARA\*\*

福岡教育大学非常勤講師

福岡教育大学

九州大学健康科学センター学術協力研究員

(平成24年10月1日受理)

Abstract

The purpose of this study is to formulate teaching material about the Olympic Games and the Olympic Movement for the junior high and high school curriculum in Japan. According to the junior high and high school course of study, which is under the supervision of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology, teachers for physical education lessons should explain the Olympic Games and Olympic Movement, and clarify the differences between them. As an outcome, the students in junior high and high schools must understand the differences and formulate correct concepts about each of them. The modern Olympic Games are generally known as a major international event featuring summer and winter sports in which thousands of athletes participate in a variety of competitions. The creation of these events was inspired by the ancient Olympics, which were held in Olympia, Greece, from BC776 to AD393. In 1894, an International Olympic Committee (IOC) was formed with Pierre de Coubertin, a French baron, as one of the central figures. Coubertin had been thinking about education for youth through sports, and his scheme finally took shape as the modern Olympic Games in 1896. The IOC has since become the governing body of the Olympic Movement, with the Olympic Charter defining its structure and authority. The Olympic Movement consists of international sports federations (IFs), National Olympic Committees (NOCs), and the organizing committees that meet each time the Olympic Games are held. The evolution of the Olympic Movement during the twentieth and twenty-first centuries has resulted in several changes to the Olympic Games. The IOC has had to adapt to the varying economic, political, and technological realities, including the dignity of man and the preservation of the environment. The doctrine of Olympism is considered a social philosophy that emphasizes the role of sports in world development, international understanding, peaceful co-existence, and social and moral education. Coubertin understood, towards the end of the nineteenth century, that sports was about to become a major growth point in popular culture and that, as physical activity, it was apparently universalisable, providing a means of contact and communication across human

cultures of the twentieth century. Therefore, the Olympic Movement has succeeded in furthering the education of youth through sports, fulfilling Coubertin's vision.

キーワード：中学校・高等学校 体育理論 オリンピック競技大会 オリンピック・ムーブメント  
Key Words：junior high schools and high schools the theory of physical education Olympic Games  
Olympic movement

### はじめに

学習指導要領が改訂され、中学校では平成24年から高等学校では平成25年の入学生から年次進行により段階的に適用されることになっている。今回の改訂によって体育理論領域にあっては、保健体育の学習における知的学習内容を担保するねらいで、各学年において必修化されたといえる。

平成11年3月の改訂の『高等学校学習指導要領保健体育編・体育編』においては、既に「体育理論」の内容として、今日の社会とスポーツとの関係や諸問題について、例えば、スポーツを通して様々な国の人々と相互に理解しあうことや国際親善の一層の推進を図る観点からオリンピック運動を教材として取り上げるようにすることも盛り込まれていたが、<sup>1)</sup> 今回の改訂では、『中学校学習指導要領解説保健体育編』（平成20年9月）で、第3学年において国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割が重要になってきていること、文化としてのスポーツが人々を結び付ける重要な役割を担っていることなどを取り扱わなければならないようになった。<sup>2)</sup> このため、オリンピックや国際的なスポーツ大会などが、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることやスポーツが、民族や国、人種や性、障害の違いなどを超えて人々を結び付けていることについての理解と教材作成が求められるよう。また、『高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編』において、体育理論領域の第1学年「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」単元において、オリンピック・ムーブメントとドーピングの学習を中心に据えることも明記されている。<sup>3)</sup>

このようにオリンピックに限っても、中学校・高等学校で取り扱うスコープとシークエンスが吟味さなければならない。そうして、双方の学校種においても最適な教材作成が望まれる。本稿では、それぞれの内容と指導の系統性を考慮した教材作成を試みようとした。オリンピック競技大会とオリンピック・ムーブメントの教材としての取り扱い方をめぐっては、オリンピックが4年に一度のスポーツの祭典であり国際競技大会であるという

周知の事項であることはもとより、オリンピックの歴史や精神の理解が異文化理解や国際親善の一層の推進を図る観点から特に重視されなければならない。また、「オリンピック競技大会」、「オリンピック・ムーブメント」の領域内容の系統的指導が求められる。すなわち、どのような内容を教材として取り扱い、それらをどのような順序で教えたらいのかという領域内容およびその範囲（スコープ）と系統性（シークエンス）の問題が問われているといえる。本稿では、それらの教材としての取り扱い方を検討した。

### 1. 中学校・高等学校保健体育科における体育理論領域の重要性

より具体的に中学校・高等学校保健体育の「体育理論」では、「基礎的な知識は、意欲、思考力、運動の技能などの源となるものであり、確実な定着を図ることが重要であることから、各領域に共通する内容や、まとまりで学習することが効果的な内容に精選」された。21世紀は社会のあらゆる領域で「知識基盤社会」であることが謳われている。新しい知識や情報、技術が社会のあらゆる領域における活動基盤として重視される時代なのである。こうした知識の重要性は学習指導要領の改訂にも反映され、保健体育科においても、運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しみ豊かなスポーツライフを送るために必要な基礎的な知識を定着させることが一層求められることとなった。<sup>4)</sup> 中学校及び高等学校の「体育理論」においては、各運動領域に共通する内容やまとまりで学習することが効果的なものを精選すると共に、中学校と高等学校での内容の系統性や発展性を考慮して内容が構成されている。

「体育理論」は体づくり運動をはじめとするそれぞれの領域の基礎になる思考や判断をもたらしたり、課題を解決するための学習のあり方を工夫したりして、学習を深めていくことが教科として保健体育科を担保していくために不可欠である。特に、スポーツ文化やスポーツの歴史を学ぶことは、個別の事象（運動やスポーツの記録や現象）の意味を問い直したり、人間の生活の中に位置づ

けたりして、運動やスポーツを総合（まとまりをつけること）することにもつながる。

中学校及び高等学校の体育理論領域の中で、「スポーツ文化」や「スポーツの歴史」の取り扱いをめぐっては、大学での科学的研究の成果としての体育哲学研究、体育・スポーツ史研究、体育・スポーツ社会学研究あるいはスポーツ人類学研究がそのことに貢献することが可能であるとしても、科学的研究の成果としての、いわゆる理論知と日々の教育実践から得られる実践知との新たな関係性の構築が求められる。

## 2. 「保健体育」の学習指導要領・体育理論領域にみる国際的な競技大会（中学校）とオリンピック・ムーブメント（高等学校）

### (1) 戦後の体育理論の出現と国際競技大会

戦後発布された『学校体育指導要綱』（小学校・中学校・高等学校・大学、昭和22年）には、保健体育の領域の一端に「体育理論」が位置づいていた。<sup>5)</sup> その指導の実態は判然としないが、当時の文部省の解説書には、雨降り時などに指導するとある。当時の他の参考書類には、体育理論の内容として、体育史やスポーツマンシップなどが例示されていた。国際スポーツとしてのオリンピック競技大会の歴史は、古代のヘレニズムへの回帰、そしてゼウス信仰のための祭典競技であることが強調されていた。<sup>6)</sup> その他の国際的なスポーツ大会としては、デビスカップについてまず言及されている。戦後、欧米のスター選手で注目されていたこの国際テニス大会に日本人も参加することが目標とされた。<sup>7)</sup> 国際競技大会と関わる意義を日本の選手が欧米の選手と肩を並べることに見出していたとみられる。

### (2) 中学校・体育理論領域のスコープ（「文化としてのスポーツの意義」に関連したオリンピック競技大会）

『中学校学習指導要領解説保健体育編』（平成20年9月）では、第3学年においては、(1)文化としてのスポーツの意義について理解できるようにするとある。<sup>8)</sup> 現代生活においてスポーツの文化的意義が高まってきていること、国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割が重要になってきていること、文化としてのスポーツが人々を結び付ける重要な役割を担っていることなどを中心として構成されているという。

このため、第3学年では、ア) スポーツは文化的な生活を営み、よりよく生きていくために重要

であること。イ) オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。ウ) スポーツは、民族や国、人種や性、障害の違いなどを超えて人々を結び付けていること。体づくり運動、ダンスや野外活動などを含む広義のスポーツが、人々の生活や人生を豊かにするかけがえのない文化となっていること、また、そのような文化としてのスポーツが世界中に広まっていることによって、現代生活のなかで重要な役割を果たしていることなどを中心として構成されている。各学年で内容の取り扱いとして3単位時間以上が必修とされているから、ア) からウ) までをそれぞれに1単位時間でそのスコープを考える必要がある。

### ① 学習指導要領の単元（ア～ウ）

#### ア) 現代生活におけるスポーツの文化的意義

「現代生活におけるスポーツは、生きがいのある豊かな人生を送るために必要な健やかな心身、豊かな交流や伸びやかな自己開発の機会を提供する重要な文化的意義をもっていること」が中心的に取り上げるべき内容である。その際、「国内外には、スポーツの文化的意義を具体的に示した憲章やスポーツの振興に関する計画などがあること」についても関連づけて取り上げることが求められている。

ここでは、特に第2条で、体育・スポーツは、教育と文化の不可欠の要素として、社会の完全な構成員としてのすべての人間の能力、意志力および自己教育力を発達させなければならないというように、その文化的意義が強調されている。これらの憲章の内容はイ) やウ) と関連する。

#### イ) 国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割

「オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会などは、世界中の人々にスポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値を伝えたり、人々の相互理解を深めたりすることで、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること」が中心的に取り上げるべき内容である。その際、「メディアの発達によって、スポーツの魅力が世界中に広がり、オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会の国際親善や世界平和などに果たす役割が一層大きくなってきていること」についても関連づけて取り上げることが求められている。

ウ) 人々を結び付けるスポーツの文化的な働き  
 「スポーツには民族や国, 人種や性, 障害の有無, 年齢や地域, 風土といった違いを超えて人々を結び付ける文化的な働きがあること」が中心的に取り上げるべき内容である。その際, 「スポーツ」という言葉自体が, 国, 地域や言語の違いを超えて世界中に広まっていること, 年齢や性, 障害などの違いを超えて交流するスポーツ大会が行われるようになってきていることについても関連づけて取り上げることが求められている。

## ②オリンピック競技大会の競技種目

「オリンピック競技大会」(Games of the Olympiad) の種目をアテネ大会(2004年)で見ると以下ようになる。①陸上競技, ②水泳, ③サッカー, ④テニス, ⑤ボート, ⑥ホッケー, ⑦ボクシング, ⑧バレーボール, ⑨体操, ⑩バスケットボール, ⑪レスリング, ⑫セーリング, ⑬ウエイトリフティング, ⑭ハンドボール, ⑮自転車, ⑯卓球, ⑰馬術, ⑱フェンシング, ⑲柔道, ⑳ソフトボール, ㉑バドミントン, ㉒射撃, ㉓近代五種, ㉔カヌー, ㉕アーチェリー, ㉖野球, ㉗テコンドー, ㉘トライアスロン<sup>9)</sup> である。国際オリンピック委員会(International Olympic Committee: IOC) は, 総会で審議し, 2007年7月に夏季オリンピックで継続的, 優先的に実施する競技として「中核競技」の導入を決定した。2012年のロンドン・オリンピックでは体操, 柔道, バスケットボール, バドミントン, 陸上, レスリング, 射撃, 水泳, セーリング, カヌー, サッカー, 重量挙げ, アーチェリー, テニス, 自転車, テコンドー, ボート, 卓球, トライアスロン, ホッケー, 馬術, 近代5種, ボクシング, フェンシング, バレーボール, ハンドボールの26競技が実施されることになっている。2016年のリオデジャネイロ・オリンピックの中核競技は特例として同数の26競技としている。2020年夏季オリンピックからは, 中核となる25競技を決めることになっており, これらはオリンピックで常に優先的に実施する競技, それ以外の競技は大会ごとの追加枠で採用される「その他の競技」というオリンピック種目新基準を設けることとなった。<sup>10)</sup> その背景には, オリンピックの伝統やイメージの維持するねらいと, 時代の流れに応じて実施競技を選択できるよう柔軟に対応するというねらいがあるものと考えられる。オリンピックの放映権を販売する際に「中核」となる競技が決定されていると円滑に運営できるといことが影響しているであろう。

(3) 高等学校・体育理論領域のスコープ(「スポーツの歴史, 文化的特性や現代のスポーツの特徴」におけるオリンピック・ムーブメントに関連して)

『高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編』(平成21年7月, 文部科学省ホームページ)において, 体育理論の内容は, 高等学校期における運動やスポーツの合理的, 計画的な実践や生涯にわたる豊かなスポーツライフを送る上で必要となるスポーツに関する科学的知識等を中心に, スポーツの歴史, 文化的特性や現代のスポーツの特徴, 運動やスポーツの効果的な学習の仕方, 豊かなスポーツライフの設計の仕方などで構成されている。<sup>11)</sup>

第1学年の「スポーツの歴史, 文化的特性や現代のスポーツの特徴」において中心的に取り上げるべき内容は以下のア) ~エ) の4項目である。この単元に6単位時間以上が配当されている。

### ①学習指導要領の単元(ア~エ)

ア) スポーツは, 人類の歴史とともに始まり, その理念が時代に応じて変容してきていること。また, 我が国から世界に普及し, 発展しているスポーツがあること。

イ) スポーツの技術や戦術, ルールは, 用具の改良やメディアの発達に伴い変わり続けていること。

ウ) 現代のスポーツは, 国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており, その代表的なものにオリンピック・ムーブメントがあること。また, ドーピングは, フェアプレイの精神に反するなど, 能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせること。

エ) 現代のスポーツは, 経済的な波及効果があり, スポーツ産業が経済の中で大きな影響を及ぼしていること。

中学校では, 運動やスポーツの必要性和楽しさ, 現代生活におけるスポーツの文化的意義, 国際的なスポーツ大会などが果たす役割, 人々を結び付けるスポーツの文化的な働きなどについて学習しているはずである。高等学校では, その学習を踏まえ, 運動やスポーツの合理的, 計画的な実践を通して, 知識や技能を深め, 楽しさや喜びを味わい, それらを生涯にわたって豊かに実践できるようにするため, 単に運動やスポーツを受動的に楽しむだけでなく, スポーツはどのような発展や変化をしてきたのか, どのような役割を果たしているのかといったスポーツの歴史, 文化的特性や現

代のスポーツの特徴などについて、中心的に取り上げなければならないという。<sup>12)</sup>

## ②オリンピック・ムーブメントとドーピングのスコープ

「現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピック・ムーブメントがあること、オリンピック・ムーブメントは、オリンピック競技大会を通じて、人々の友好を深め世界の平和に貢献しようとするものであること」及び「競技会での勝利によって賞金などの報酬が得られるようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が起こるようになったこと、ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であること」が中心的に取り上げるべき内容である。その際、ドーピングが重大な健康被害を及ぼすことについても関連づけて取り上げることが求められている。なお、指導に際しては、中学校で「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的役割」を学習していることを踏まえ、オリンピック・ムーブメントとドーピングに重点を置いて取り扱うことも求められている。<sup>13)</sup>

ピエール・ド・クーベルタンは、1896年にオリンピック競技大会を創始するにあたって、自ら渡英しパブリック・スクールのいくつかを訪問していた。パブリック・スクールにおける課外ゲーム活動と青少年の教育への憧憬が深かったことに触れるとよい。クーベルタンは、スポーツは子どもを「若者」や「大人」に育成し、青少年に人間形成や道徳形成の鍛錬手段を与える教育的文化的営みであるとした。<sup>14)</sup> そうした考え方はオリンピックズムともかかわる。ここでのスコープはオリンピック・ムーブメントなのであるから、オリンピック競技大会の事項を学ぶのではなく、オリンピックが持つ根源的な考え方としてのオリンピックズムとそれを広めるための活動としてのオリンピック・ムーブメントを取り扱わなければならないであろう。

オリンピック憲章の根本原則には、「オリンピックズムの根本原則」が以下のように記されている。

1. オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意思と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピックズムが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、よい手本

となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。

2. オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。<sup>15)</sup>

こうした根本原則の理解によって、ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であることも理解しやすくなる。

## 3. オリンピック競技大会の理解と教材作成

### (1) オリンピックの語源（なぜオリンピックというのか？）

オリンピックという言葉にちなんだ語源をたどると、いくつかの説がある。古代ギリシャには先住民族がいたが、紀元前1100年のドーリア人の南下が古代ギリシャを形成する上で重要な足跡を残したとよい。地中海に面したギリシャへ南下するにはオリンポス山（2,917m）という難所があった。この山越えを念じてゼウス信仰という託神が生じた可能性は否定できない。そして、ギリシャ地方へ南下したドーリア人は、オリンピアの地をゼウス信仰の聖地として崇めることになった。この地名こそがオリンピックの語源となっている。さらに、ゼウス信仰のため4年に1回の祭典行事が挙行され、ここに4年間という大きな暦が古代ギリシャに登場する。つまり、オリンピアード（4年間）という暦もオリンピックの語源を考える際に重要な要素である。今日、4年に1回オリンピック競技大会を開催する歴史的根拠の1つともなっている。<sup>16)</sup>

### (2) 古代オリンピックへの歴史的回顧

古代オリンピックは、ギリシャのペロポネソス半島北西部のエリス地方にあるゼウスの聖地オリンピアで、記録によれば紀元前776年以後、4年ごとに開催される最大の全ギリシャ祭典競技（古代オリンピック）であった。ゼウス神殿近くに存在した直線約190mの競技場はスタディオン（スタジアムの語源）と呼ばれ、神殿の方角に向かって細長い直線の走路を成していた。競技者は、神殿に遠い方から神殿に向けて短距離走で競うわけである。結果としての順位は、ゼウス神殿への拝礼順序を決定するわけで、1位になることは最大の名誉であり、オリーブの葉冠が贈られた。この

ように古代ギリシャのゼウス信仰と結びついた競技精神は、古代ギリシャ人にとって心の支えであり、4年に1回の祭典行事は是非とも実施しなければならなかった。当時の古代ギリシャの都市国家（ポリス）は、互いに慢性的な戦争状態にありながら、祭典が実施できたのは、選手や観客の安全を保証する古代オリンピックのための戦争の一時休止（エケケイリア）の協定が遵守されたからであった。<sup>17)</sup>

古代オリンピックは時代を経るごとに、競技種目が多様化し、競技場も次第に神殿から遠ざけられ、世俗化していく（宗教的要素が次第に希薄化していく）傾向にあった。それらの種目は、直線競走（スタディオン）、折り返し競走（ディアウロス）、折り返し長距離走（ドリコス）、五種競技〔ペントトゥロン：競走、幅跳び（ハルマ）、円盤投げ（ディスコボリア）、槍投げ（アコンティスモス）、レスリング（パレ）〕、レスリング、ボクシング（ピュグメ）、パンクラティオン（レスリングとボクシングの要素を含めた最も過酷な格闘技）、武装競走（ホプリテス）、馬の競技（アゴン・ヒッピコス）：競車、競馬などである。競技者は、常に裸体で競技しなければならなかった。<sup>18)</sup>特に古代ギリシャの（奴隷でなく）自由民で男性であること、そして、彼らにとっては競技に卓越することが名誉であり、美德であった。裸体を意味する接頭辞（gym-）は西欧語に引き継がれ、今日多くの体操関連用語に継承されている（体育館 gymnasium、体操 gymnastics 等）。<sup>19)</sup>

長距離走は、ドリコスといってスタディオンを何回も往復するものであった。BC490年、マラトン（Marathon）の戦いでアテネ・スパルタの連合軍がペルシャの大軍を迎え撃って勝利したとき、アテネの伝令が戦勝報告のためにマラトンからアテネまでの距離を走り続けたという、いわゆる「マラソン故事」として語り継がれている。今日、42.195kmを走るマラソンの名称は古代ギリシャの地名に由来する。<sup>20)</sup>

古代オリンピックは、マケドニア王家、ローマの初代皇帝オクタヴィアヌス、紀元2世紀の五賢帝の下でも継続して実施された。それはギリシャ人を統治するためにオリンピックを効果的に利用するという、支配民族による政治的配慮もあって、ギリシャ人の宗教的祭典に寛容であったからである。しかし、古代ローマがキリスト教を公認し、勢力下の古代ギリシャ人のゼウス信仰を異教としたことによって古代オリンピックは終焉を迎えることになった。ローマのテオドシウス帝は、紀元

392年に異教の祭祀を禁止し、翌393年に開催されたオリンピア祭（293回）が最後であったといわれている。しかし、記録によれば、BC776年からAD393年の1169年もの間、古代オリンピックが続いたことを、我々は現代に照らし合わせて考えてみなければならない。近代オリンピックは、今日、世界平和の恒久と青少年の教育のために実施される国際的な競技大会であるが、1896年から今日まで116年程度継続されているに過ぎないからである。<sup>21)</sup>

### (3) 近代オリンピックの歩み

#### ①クーベルタンのイギリス・スポーツへの関心

オリンピック・ムーブメントについて深めるための教材の取り扱い方として、近代オリンピックの開催の経緯を理解することが不可欠となる。それは、フランスの貴族クーベルタン男爵（Pierre de Coubertin）のイギリス・スポーツとの出会いに始まっている。クーベルタンは、フランスのソルボンヌ大学に学び、卒業後渡英してオックスフォード大学に留学した。そこでの彼の関心は、トーマス・アーノルドによるパブリック・スクールの改革であり、スポーツによる人格陶冶を成功させたことであった。クーベルタンはトマス・ヒューズ著の『トム・ブラウンの学校生活』（ラグビー校を題材にした教育小説）に深く感激して教育的情熱を燃していた若者であった。フランスに帰国した後、クーベルタンは24才の若さで時の文部大臣ジュール・シモンに対して、当時のフランス教育界が知識のみを重視していたのをスポーツによって革新しようという意見具申をしている。さらに29才で近代オリンピックの構想を公表し、その後もIOCの会議の折々には絶えず彼独自のオリンピック哲学を演説し続けた。<sup>22)</sup>

クーベルタンが近代オリンピックを復活させるに至った背景には、多くのことが考えられるが、その中でもプロシア政府、特にE.クルティウスらによる古代オリンピア聖域の遺跡が見事に発掘されたことが大きく影響したであろう。しかしそれ以上に、近代オリンピックを新しい体制で再興させようとする意向の底には、クーベルタン自身に内在していた青少年への教育的情熱が燃えていたことをあげねばならない。1922年に彼は『スポーツ教育学』という著書を出版している。古代オリンピックと比較して、近代オリンピックにはクーベルタンの提唱による青少年の教育というねらいが、その精神として引き継がれなければなら

ない。このことがオリンピック・ムーブメントと深くかかわる。<sup>23)</sup>

## ②近代オリンピック開催年及び開催地

クーベルタンが提唱した近代オリンピック（オリンピック競技大会）は今日までに第30回までを数えている。第28回大会（2004年）はアテネ、第29回大会（2008年）は北京での開催が決定されている。ここで近代オリンピック開催年と開催地を一瞥したいのであるが、夏の大会は、第1回大会から4年に1回のスケジュールから逸脱することなく開催されていることに気づくであろう。第一次大戦中の第6回大会（1916年）ベルリン、第二次大戦前後の第12回大会（1940年）東京と、第13回大会（1944年）ロンドンは、中止となっている。中止であっても数えていることに、Olympiad（オリンピック憲章第1章の10 オリンピアードとは、連続する4年間を意味する。）の意味が暗黙のうちに存在している。一方、冬の大会、1924年開催のフランスのシャモニー・モンブラン開催の大会を第1回大会としているが、実はこれは1926年にIOCが当該地域で開催された別の冬季競技を第1回冬季オリンピック競技大会とすることを認めたもので、五輪史上唯一、事後承認の大会となっている。また、第二次大戦前後の期間は中止となり、大会回数に数えないことも夏の大会と異なる。冬季オリンピック競技大会の大きな変化は、第16回（1992年）アルベールビルでの開催の後、2年後第17回大会を1994年にリレハンメルで開催していることである。そして、その後4年ごとに第18回大会（1998年）長野、第19回大会（2002年）ソルトレークシティ、第20回大会（2006年）トリノ、第21回大会（2010年）バンクーバー、第22回大会（2014年）ソチ、第23回大会（2018年）平昌（ピョンチャン）と続く。それまで、オリンピックの年（いわゆるオリンピック・イヤー）は、4年に1回で、その年の2月頃冬季オリンピック大会があり、引き続いて同じ年の夏にオリンピック競技大会が開催されていた。このサイクルをIOCが見直したことになる。<sup>24)</sup>

## 4. オリンピック・ムーブメントの理解と教材作成

### (1) オリンピック・ムーブメントとオリンピズム

オリンピック・ムーブメントは Olympic movement と英語表記され、オリンピックの持つ真の目的や理想の追求を理解させ、強く世界に広めようとする運動のことをいう。それは、オリ

ンピズム（Olympism）という思想に支えられている。オリンピズムとは、スポーツ競技を通じて身体を鍛錬するとともに全人としての発達をめざし、スポーツマンシップのもととなっている相互扶助の観念を強め、世界平和にも寄与していこうとする考え方のことである。<sup>25)</sup>

### (2) オリンピック憲章とオリンピック参加の哲学

近代オリンピック競技大会の規約は1925年になってようやく確定され、オリンピック憲章（Olympic Charter）と呼ばれた。第二次大戦後、1954年に根本原則（Fundamentals）と改称された経緯もあるが、現在ではオリンピック憲章として、冒頭に9箇条の根本原則が述べられ、オリンピック・ムーブメントの趣旨が明記されている。オリンピズムは、「肉体と意志と知性の資質を高揚させ、均衡のとれた全人のなかにこれを結合させることを目指す人生哲学」であるという。全人とは、全うな人間と読み替えてもよい。オリンピズムが求めるのは、文化や教育とスポーツを一体にし、努力のうちに見出されるよろこび、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などをもとにした我々人間の生き方の創造なのである。スポーツを人間の調和のとれた発育に役立て、人間の尊厳を保つことに重きを置く平和な社会の確立を奨励することがその背景にある。この意味ではオリンピック・ムーブメントには、スポーツを通して様々な国の人々と相互に理解しあうことや国際親善の一層の推進を図る観点が重視されているといえる。すなわち、オリンピック・ムーブメントの目的は、いかなる差別をも伴うことなく、友情、連帯、フェアプレーの精神をもって相互に理解しあうオリンピック精神に基づいて行なわれる。オリンピックに参加すること（participate,あるいはtake part in）について、選手は正々堂々と全力を尽くして、役員・審判は、厳正にそして、公正にふるまうことが求められている。参加はそれぞれの役割を担う（責任をもって遂行する）意味なのである。そして、スポーツを通して青少年を教育することにより、平和でよりよい世界をつくることに貢献することにある。オリンピック・ムーブメントの諸活動は、結び合う5つの輪に象徴されるように（オリンピック旗）普遍且つ恒久であり、五大陸にまたがるものと解釈される。その頂点に立つのが世界中の競技者を一堂にあつめて開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会である。スポーツの実践はひとつの人権であり、何人もその求めると

ころに従ってスポーツを行う可能性を持たなければならないという。<sup>26)</sup>

### (3) オリンピック関連組織

オリンピック・ムーブメントを推進し、オリンピズムを普及させるために、オリンピック関連組織が存在している。オリンピック憲章にもあるとおり、IOCはオリンピック・ムーブメントの最高機関であり、近代オリンピック競技大会を統括し、発展させる責任を課せられた国際委員会である。IFは、競技種目ごとに組織される国際的な統括団体としての国際競技連盟である。オリンピック憲章ではこのIFの承認とその役割を明記している。NOCは国内オリンピック委員会のことで、国際オリンピック委員会の公認の下で活動する1つの国内唯一のオリンピック委員会としてオリンピック憲章に従い、それぞれの国においてオリンピック・ムーブメントを推進し保護する任務を持っている。これらの組織は、オリンピック憲章に規定されている。その他に、これらの組織と連携し、IOCと密に協力しながら、オリンピックの精神の保存と普及、オリンピック大会の教育的、社会的原則の研究及び実行などの業務を遂行する研究機関として国際オリンピック・アカデミー (International Olympic Academy: IOA) が存在している。なお、日本をはじめ17もの国には、国内的にオリンピック・ムーブメントに関する研究組織が存在している。日本には、国際オリンピック・アカデミーの目的を日本国内において実現するために、JOCと提携してオリンピズムの研究と普及に寄与することを目的とする団体として、日本オリンピック・アカデミー (Japan Olympic Academy :JOA) が存在している。<sup>27)</sup>

### (4) パラリンピック

パラリンピックは国際パラリンピック委員会 (International Paralympic Committee: IPC) が主催する障害者のための国際競技大会である。第二次世界大戦後、イギリスのストーク・マンデビル病院の医師が兵士のリハビリテーションの一環としてスポーツを取り入れていた。この病院では1948年のロンドン五輪開会式前日に車いす患者によるアーチェリー大会を開催し、これがパラリンピックの原点となった。のちに国際競技会として広がりを見せ、IPCは1960年にオリンピック協議会の開催地、ローマで行われた競技会を第1回パラリンピックと名付けた。このような経緯からパラリンピックという名称は下半身麻痺を

示す paraplegia (パラプレジア) と Olympic を合わせた造語として知られることとなった。これまで競技会は車いす使用者を中心に発展してきたが、1976年のトロント大会からそれ以外の障害を持った選手の参加も許されたことなどを背景に、パラリンピックの「パラ」を paraplegia から parallel (パラレル・もう一つの) として、もう一つのオリンピックの意味を持つ名称となった。1988年のソウル大会以降、正式名称となっている。2000年、IOCとIPCの各会長間において合意形成がなされ、両組織は密接な協力関係を持つようになった。我が国では、日本障害者スポーツ協会の内部組織として日本パラリンピック委員会 (Japan Paralympic Committee: JPC) が設立された。<sup>28)</sup>

IOCが規定しているように、オリンピック競技会の価値が卓越 (Excellence)、友情 (Friendship)、尊敬 (Respect) であるが、パラリンピックではさらに勇気 (Courage)、決断 (Determination)、鼓舞 (Inspiration)、平等 (Equality) をその価値として学習内容として位置づけることができる。<sup>29)</sup>

### (5) オリンピックと環境問題

環境問題が国際的に問題視されるようになると、IOCのサマランチ元会長は、オリンピック・ムーブメントの柱として、それまでの「スポーツ」、「文化」に「環境」を加え、3本の柱とした。これを受けてオリンピック憲章にも環境保全が盛り込まれ、1995年以降「スポーツと環境委員会」の設置や「IOCスポーツと環境世界会議」の開催、「スポーツと環境マニュアル」や「オリンピック・ムーブメント・アジェンダ21」によって環境への配慮が進められた。これにより、IOCは環境保全の一層の啓発を図るとともに、オリンピックの開催都市では、資源の節約、交通やエネルギーなどに関する様々な実践、工夫がなされている。<sup>30)</sup>

まとめにかえて (教材のスコープ及びシークエンスとしてのオリンピック競技大会とオリンピック・ムーブメント

図1 (図1. オリンピック・ムーブメントの概念図 [田端・榊原 2012]) に示したように、オリンピック競技大会とオリンピック・ムーブメントの教材のシークエンスは以下のように理解することができる。

- ① オリンピック競技大会 (オリンピック冬季競技大会) は、オリンピック競技大会組織委員



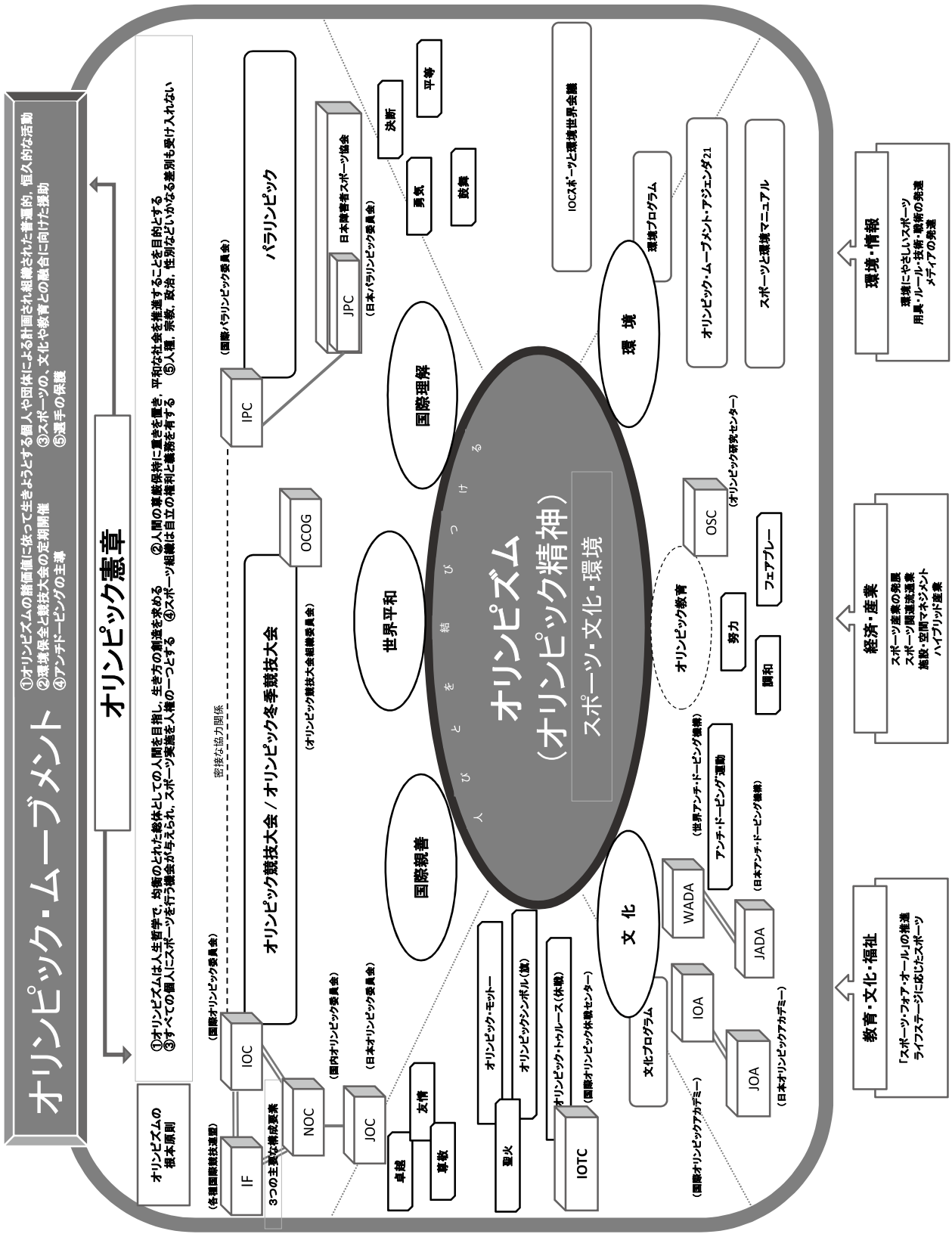


図1. オリンピック・ムーブメントの概念図 (田端・神原, 2012)

会 (OCOG) によって運営され、3つの主要な構成要素である IF, IOC (国際オリンピック委員会), 及び NOC (国内オリンピック委員会) によって支えられている。また、IPC (国際パラリンピック委員会) は IOC と密接な協力関係を構築している。中学校では、オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会などは、世界中の人々にスポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値を伝えたり、人々の相互理解を深めたりすることで、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることが中心的に取り上げるべき内容である。また、スポーツには民族や国、人種や性、障害の有無、年齢や地域、風土といった違いを超えて人々を結びつける文化的な働きがあることも学習内容である。

- ② オリンピック・ムーブメントは、①のオリンピック競技大会を包含しており、「オリンピズムの諸価値に依って生きようとする個人や団体によって計画され組織された普遍的、恒久的な活動」として位置づいている。その根幹はオリンピズム (オリンピック精神) にある。したがって、図の全体部分は広範囲のオリンピック・ムーブメントを示し、中心部分はオリンピズムの考え方によって支えられている。オリンピック競技大会が、国際親善、世界平和、国際理解に寄与していることはもちろん、オリンピズムは「スポーツ」「文化」「環境」をキーワードにしている。それぞれオリンピックを構成する関連組織、スポーツの文化・教育的価値を広く普及させる組織や活動が数多く挙げられる。
- ③ オリンピック・ムーブメントは、人類の教育・文化、福祉、社会・経済・産業、環境・情報などの社会的バックグラウンドが影響を与えているといえる。したがって、図1の下部にそのことを例示した。

体育理論領域をオリンピック競技大会とオリンピック・ムーブメントの2つのスコープで考えると、①が中学校②が高等学校というように、シークエンスを提示することが可能である。こうした考え方は、中学校ではオリンピック競技大会のテレビ中継を視聴するなどした経験から、中学生という個人的な立場で国際的な競技大会の果たしている役割を考えようとする。一方で、高等学校では、社会の中でのオリンピック・ムーブメントが果たしている役割や、社会的に影響を与えている

ことを理解しようとする。

競技大会に参加する選手に、直接的に関係する事項のみならず、メディアなど情報の発達、スポーツそのものの技術や戦術の発達、ルールや用具の改良などに影響を受けているからである。

今日、スポーツが世代を問わず広く普及していることにともなって、より一層の「スポーツ・フォア・オール」の推進や各ライフステージに応じたスポーツのあり方についての理論内容とも関連づけられる。また、高等学校での単元としてスポーツ産業の歴史も、スポーツ関連流通産業などのスポーツ産業の発展についてもオリンピック・ムーブメントに影響を与えているととらえられる。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省, 『高等学校学習指導要領解説保健体育編 (平成 11 年 3 月), 1999 年, pp.63-64.
- 2) 文部科学省『中学校学習指導要領解説保健体育編』(平成 20 年 9 月), 東山書房: 京都, 2008 年, pp.134-135.
- 3) 文部科学省, 『高等学校学習指導要領解説保健体育編』(平成 21 年 7 月) 文部科学省, 2009 年, pp.92-93.
- 4) 同上書, pp.1-4.
- 5) 文部省, 『学校体育指導要綱』, 1947 年, p.12.
- 6) 東京教育大学附属中学保健体育研究会編, 『中学体育読本』(改訂版), 和光書房, 1953 年, pp.110-114.
- 7) 同上書, pp.167-169.
- 8) 前掲書, 『中学校学習指導要領解説保健体育編』(平成 20 年 9 月), pp.134-135.
- 9) 特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会, 『未来と結ぶオリンピック～勇気・地球・共生～』, 発行: 東京都/財団法人日本オリンピック委員会/特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会, 図書印刷: 東京, 2008 年, p.11.
- 10) 日本オリンピック・アカデミー編, 『ポケット版オリンピック事典』, 「1-10 オリンピックの実施競技」, pp.39-40.
- 11) 前掲書, 『高等学校学習指導要領解説保健体育編』(平成 21 年 7 月), pp.92-93.
- 12) 同上書, p.93.
- 13) 同上書, p.93.
- 14) 阿部生雄, 『近代スポーツマンシップの誕生と成長』, 筑波大学出版会, 2008 年, pp.243-

- 247.
- 15) 前掲書, 『未来と結ぶオリンピック～勇気・地球・共生～』, p.14.
  - 16) 榊原浩晃「高等学校の体育理論教材を扱う際の内容研究—オリンピック運動の教材としての扱い方—」, 福岡教育大学教育実践総合センター発行編『授業実践ハンドブック—教科内容研究特集—(第2集)』, 2004年, p.171.
  - 17) 同上書, p.171.
  - 18) 同上書, p.171.
  - 19) 同上書, p.171.
  - 20) 田端真弓, 「マラソン」, 新井博・榊原浩晃編, 『スポーツの歴史と文化—スポーツ史を学ぶ—』, 道和書院, 2012年, p.38.
  - 21) 前掲書, 榊原浩晃「高等学校の体育理論教材を扱う際の内容研究—オリンピック運動の教材としての扱い方—」, p.172.
  - 22) 同上書, p.172.
  - 23) 同上書, p.172.
  - 24) 日本オリンピック・アカデミー編, 『ポケット版オリンピック事典』, 「オリンピック大会の開催地一覧」, p.249.
  - 25) 前掲書, 『未来と結ぶオリンピック～勇気・地球・共生～』, p.14.
  - 26) 前掲書, 榊原浩晃「高等学校の体育理論教材を扱う際の内容研究—オリンピック運動の教材としての扱い方—」, p.173.
  - 27) 同上書, p.174.
  - 28) 前掲書, 『ポケット版オリンピック事典』, 「1-14 パラリンピックとは」, pp.47-48.
  - 29) 真田久, 「オリンピックを体育理論の教材にするヒント」『体育科教育 2012年7月号』, 大修館書店, 2012年, pp.18-21.
  - 30) 前掲書, 『未来と結ぶオリンピック～勇気・地球・共生～』, p.36-37.

